

平成 22 年 8 月 26 日

各 位

プロジェクト事務局
(帯広信用金庫地域経済振興部)

『とち酒文化再現プロジェクト』立ち上げについて

今般、関係各位のご支援と連携により、帯広信用金庫地域経済振興部が事務局となり、『とち酒文化再現プロジェクト』を立ち上げましたので、お知らせいたします。

本プロジェクトは、当地において寛政初年頃より醸造されたと伝えられている『地酒』をとおして、十勝の酒文化を再現し、新たな産業の創出と関連産業の振興を図り、そして地域経済に元気を取り戻そうと、農商工・産学官金融の連携により実現したものであります。

記

1. プレスリリース

○日 時 平成 22 年 8 月 25 日(水) 午前 10 時

○場 所 経済センタービル内 帯広商工会議所 6 階特別会議室
(帯広市西 3 条南 9 丁目 1-1)

○出席者 帯広市 副市長 本迫 哲
帯広商工会議所 会頭 高橋勝坦
帯広信用金庫 理事長 増田正二
常務理事 中村利雄
木野農業協同組合 組合長 柴田賢一
田中酒造株式会社 代表取締役 田中一良

2. 連携機関 音更町、帯広市・帯広酒販協同組合・帯広商工会議所・帯広信用金庫
帯広畜産大学・木野農業協同組合・田中酒造株式会社
北海道十勝総合振興局

3. その他 資料 『とち酒文化再現プロジェクト
～十勝酒造組合生誕 100 年～』は別添。

プロジェクト事務局 帯広信用金庫 地域経済振興部 秋元・尾澤
電話 0155-23-7590

以 上

とちぎ酒文化再現プロジェクト
～十勝酒造組合生誕100年～





とがち酒文化再現プロジェクト

～十勝酒造組合生誕100年～



平成22年8月25日（水）於 帯広商工会議所6階特別会議室
とがち酒文化再現プロジェクト

1910年 十勝酒造組合設立



明治末期までは、酒造業は紡績業とともに我が国の主要産業であった。

明治43年(1910年)に「十勝酒造組合」が地酒七業者によって設立され、工業系同業組合の走りとなった。

同時に酒造業は、原料を本州より移入し、最終商品化する製造業の走りでもあった。

「小川酒造店」小川富吉が、町一番の高額納税者(44年)であり、八番目、愛須梅次郎(小間物商)一族が経営する「愛須醸造店」がそうであるように、醸造家達は抜きん出た資産力も手伝って、町の政治経済に大きな発言力を有したのであった。

十勝清酒製造の歴史



広尾町	寛政初年 明治13年以降	茂寄村運上屋(会所)で酒を醸す 若松忠次郎・山崎金助・刀弥喜八 四十物惣助		
	明治35年	広尾酒造組合設立(本通り5丁目)	「万才」→「千勝」	後に、里瀬甚作(日高出身)は道具類を借用し醸造 明治43年林寅太郎の個人経営となる。昭和16年廃業
帯広市	明治28年 明治33年 大正元年 大正4年	白浜忠吉(大通8丁目) 小川富吉(東1条10丁目) 酒井啓太郎(大通4丁目) 帯広酒造(合資)(東2条7丁目) (愛須梅次郎・宮本富次郎)	「金清水」 「鬼殺」「富士川」昭和はじめから「晃邦」 「菊天狗」 「亀の露」	明治43年西1条6丁目に移転 昭和3年日本清酒に売渡 昭和10年梶野宗五郎が買収
清水町	大正11年	清水酒造(株)設立(現北2条4丁目) (松山金次郎)	「きよ泉」「天津」「蝦夷自慢」	昭和56年廃業
本別町	大正4年	新津繁松(現南1丁目)	「家内喜(ヤナギ)」「千代寿(チヨジュ)」	昭和11年閉店
幕別町	明治37年 大正元年 昭和41年	加藤酒醸店加藤広吉(千住) 協清吉(猿別市街) 日本清酒(株)	「北の星」 「千歳鶴」	昭和18年閉店 大正4年火災で廃業 昭和61年製造中止
新得町 芽室町	第一次大戦後 明治43年年	協清吉(幕別から移住) 山本外次郎	「狩勝」「国境正宗」「国華」「花心」「北の泉」 「長寿」「千代正宗」	昭和48年製造中止

～各市町史誌参考に作成～

清酒製造場の変遷 (昭和21年酒造年度以降)

晃邦(小川ツタ)⇒昭和29年小川銘醸(株)⇒昭和45年廃業

亀の露(帯広酒造(資))⇒昭和47年合同酒精に委託醸造⇒昭和54年廃業

きよ泉(松山護)⇒昭和29年松山酒造(株)⇒昭和56年廃業

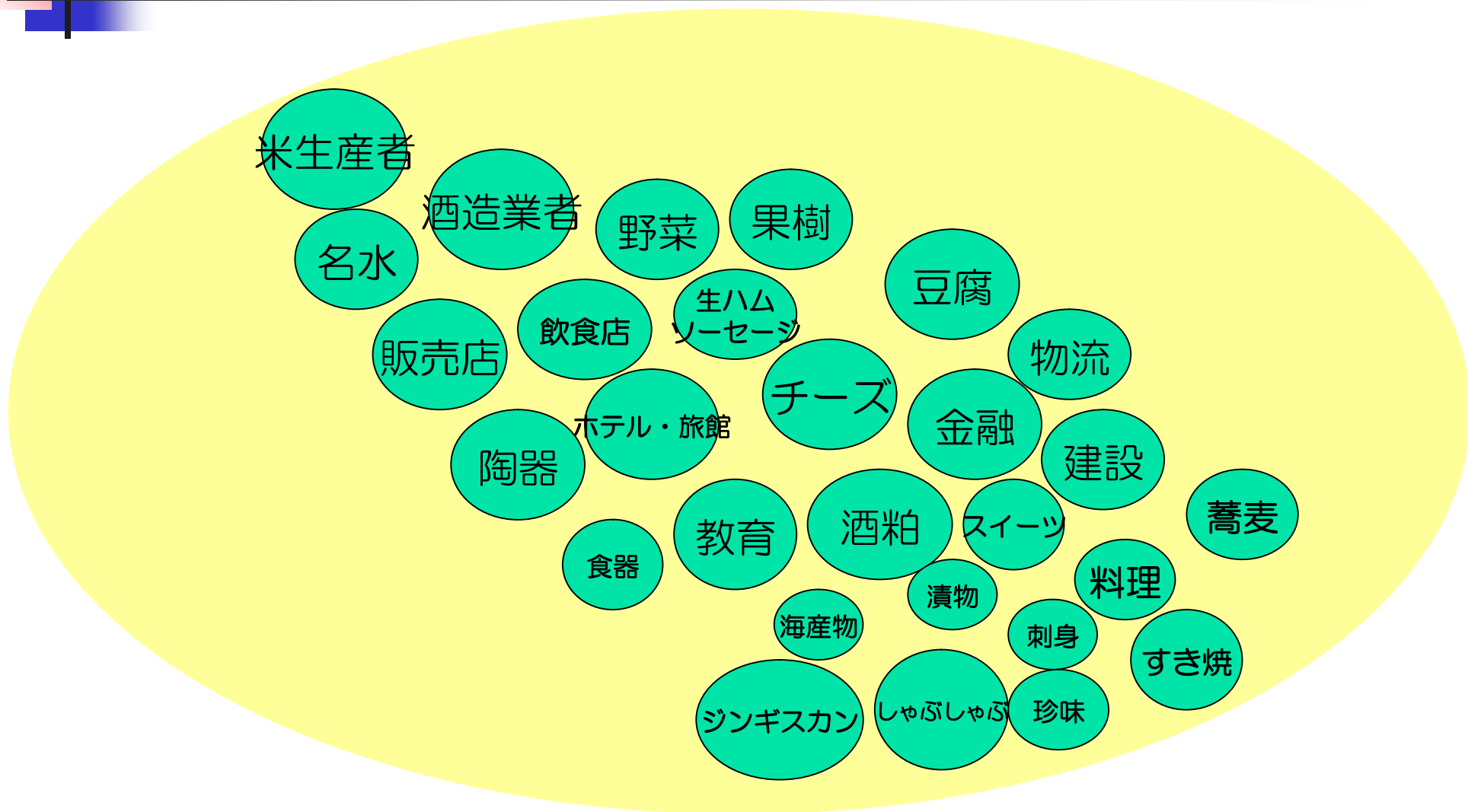
長寿昭和23年復活(十勝酒造(資))⇒昭和49年松山酒造(株)に委託醸造⇒昭和55年廃業

千歳鶴昭和42年復活(日本清酒(株)帯広工場)⇒昭和59年製造中止



～北海道酒造組合提供～

地酒産業クラスター形成 (農商工連携)

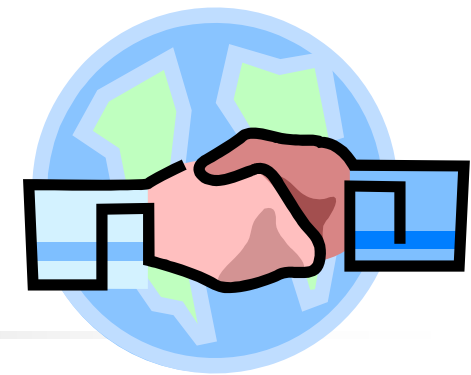


プロジェクト活動項目

酒造好適米の研究
十勝酒造歴史の調査
ネーミング
パッケージ
販売ツール
酒造指導
醸造場設置の可能性検討



プロジェクト連携機関



音更町	町長	寺山 憲二
帯広市	市長	米沢 則寿
帯広酒販協同組合	理事長	川合 宏良
帯広商工会議所	会頭	高橋 勝坦
帯広信用金庫	理事長	増田 正二
帯広畜産大学	学長	長澤 秀行
木野農業協同組合	組合長	柴田 賢一
田中酒造株式会社	代表取締役	田中 一良
北海道十勝総合振興局	局長	竹林 孝

(五十音順)

事務局 帯広信用金庫地域経済振興部

プロジェクト工程表



平成22年度				平成23年度													
2Q		3Q		4Q		1Q		2Q		3Q		4Q					
プロジェクト立ち上げ・リリース		ワーキングチーム発足・十勝酒造の歴史調査		好適米研究・営農計画策定		作付計画地看板設置		ネーミング・パッケージ・販売ツール検討		田植え・ツアー		収穫・ツアー		醸造開始		商品提供	

～ 資料 編 ～

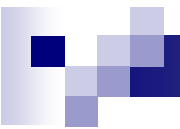


十勝清酒製造の歴史(広尾町)①



明治13年までの200余年間、名実ともに十勝国の首邑であった広尾郡茂寄村(広尾)の運上屋(会所)では、昔から糶を作り、酒を醸した。

明治14年7月から12月までの半年に、清酒と濁酒とを10石ずつ生産している。売価は清酒が一升33銭5厘、濁酒が20銭であった。



十勝清酒製造の歴史(広尾町)②

本町における醸造業の先駆は、酒の醸造であるが、もともと漁業に従事するため集まる漁夫と土人介抱のために会所でつくったものでその年代は、明らかでないが、少なくとも寛政初年からであろうと思われる。

明治14年6月広尾当縁二郡戸長からの報告によれば清酒製造高10石、濁酒15石、価格は清酒1石35円、濁酒は1石20円とその生産額は650円となっている。

明治13年十勝漁業組合の解散後、最初若松忠次郎、次は山崎金助が醸造に当った。山崎たつ(金助娘)の語るところによればその後四十物惣助、刀弥喜八も手がけたことがあったが、同29年日高から移って来た里瀬甚作がこの道具類を借用して、醸造したこともあったという。

生産量は清酒濁酒合わせて年間15石程度で、醸造期には河西税務署から係の役人が出張して来て、会所通りの小間物屋加藤という家に下宿して検査に当ったものという。

十勝清酒製造の歴史(広尾町)③



明治35年に至って広尾酒造組合を組織し、出資者をつのり3月26日から醸造を始めた。役員には専務取締役山崎金助、監査員西川宗次郎、立林歌吉、評議員林寅次郎、黄金健次郎が当った。

林寅次郎の語るところによれば

『私の記憶では37、8年頃から7、8人の共同で経営していたが、林寅太郎の個人経営となったのは、同43年からであった。初め酒名は「万才」と称していたが、他に同名の登録済のものがあることを知り、45年頃になって「千勝」に改め売出した。仕向地は地元の外、広尾線一円であった。酒倉は本通り5丁目仲通りの角のところにあって、恐ろしく古い、間口十間に奥行十間位の屋根勾配のゆるい建物で、屋根には柱を押えるため、石がのせられてあった。新通4丁目に酒倉を新築したのは大正12年である。杜氏は高山友吉、次に堀川喜助に替った。酒米は主として、青森、秋田米を使用し、朝鮮米を使ったこともあった。』という。

昭和16年戦時下の企業整備の波のなかで廃業した。

～昭和57年9月20日発行 新広尾町史～

～昭和35年12月1日発行 広尾町史～



十勝清酒製造の歴史(帯広市)

白浜忠吉(はじめ、清水姓)の酒造も、明治28年の創業とされている。大通8丁目で銘酒「金清水」を作り、卸1升17銭、小売25銭で売った。米1表3円の時代である。酒樽はオベリベリの湧水で洗った。

白浜酒造店で杜氏を働いていた小川富吉(のち晃邦と改名)が東1条10丁目に酒造工場を建てたのは明治33年であった。銘酒「鬼殺」「富士川」を売りだし、43年西1条6丁目に移転、併せて「**小**印」の味噌醤油を醸造した。酒の銘柄は、昭和はじめから「晃邦」一本となり、戦後に至った。

大正元年、酒井啓太郎が大通4丁目に銘酒「菊天狗」を売出した。酒井は、大正3年に死去、妻トクが業務を継いで十数年を経過、昭和3年日本清酒(本社札幌市)に売渡し、こんどは「千歳鶴」醸造に切替った。この工場は21年1月全焼、24年に再建されてからは「寿みそ」一本に変わった。

大正4年、愛須梅次郎と宮本富次郎が帯広酒造(合資)を興し、東2条7丁目で「亀の露」醸造をはじめた。昭和10年、梶野宗五郎が買収した。

十勝清酒製造の歴史(清水町)



大正初期の十勝管内の酒造業者は、酒造史によれば、新得、芽室、止若(札内)、広尾、本別の各地に1業者と、帯広に3業者の8業者が営業していた。

本町では大正11年(1922)に松山金次郎、今中助五郎、生本昇、及川与兵衛、桑島冬治、清原治平、桑島又市、山本金作、村瀬繁信、寺島徳重ら14名が株主となって、清水酒造株式会社を設立、字清水第1線66番地(現北2条4丁目)に貯蔵倉庫、仕入倉庫、仕事場、住宅建設、地酒の製造を始めた。初代社長は芽室の清原治平が当たり、専務取締役には松山金次郎が就任した。

銘柄は清酒では「きよ泉」「天津」「蝦夷自慢」の3銘柄で、かすとり焼酎では「剣山」「金鶴」の2銘柄があった。

清水酒造株式会社は、昭和8年に解散し松山酒造店と改組、松山金次郎の経営となり昭和29年に再び法人組織に改組された。現在は金次郎の子息護が経営に当たっている。昭和51年度は150kl、8千万円を製造した。昭和56年廃業した。

～昭和57年1月30日発行 清水町史～

～平成17年2月25日発行 清水町百年史～



十勝清酒製造の歴史(本別町)



大正4年3月、新津繁松が現在の南1丁目、浦幌農協上浦幌支所の東側あたりに酒造工場を建てて、酒造店を開いた。

年間約5百石を製造し、銘柄は家内喜(ヤナギ)、千代寿(チョジユ)の二種類であった。

昭和11年3月に閉店した。



十勝清酒製造の歴史(新得町)



幕別から移住してきた脇清吉は、いまの元町(旧番外地)付近で湧水を利用して酒造業を営み、「狩勝」ほか「国境正宗」、「国華」、「花心」、「北の泉」などの地酒をつくり、その名を広めた。

～ 史誌には明確な時代の記載はないが、文脈から第一次世界大戦後と思われる。～



十勝清酒製造の歴史(幕別町)①

幕別町の酒造の歴史は古く、明治39年に360石の清酒が製造されている。

この醸造元は加藤広吉の「加藤酒醸店」。加藤が酒造りを始めたのは37年。千住の加藤味噌正油醸造店が幕別の酒造発祥の地である。加藤が白人村(現在の千住)で酒造りのため杜氏を招き、米1石を蒸したが思うように蒸せず、このため、宗教家をうやうやしく白馬に乗せて招き祈祷させたという裏話もあった。のち加藤は施設一切を弟(唯蔵)に譲って止若で新しく酒醸店を開店した。移転した年代の記録はないが、唯蔵が味噌正油の醸造を始めたのが42年、また、製澁の項で新田長次郎が加藤のことと思われる件を著書の中で述べているところから40年か41年に移転したもののようである。

加藤酒醸店は現在の興農産業株式会社がその跡地。興農産業所有の倉庫内部には酒造り当時の構造がそのまま残されている。酒醸店は大正、昭和と続き、戦争の影響で極端な物不足となった昭和18年に原料米の手配がつかず閉店した。加藤酒醸店の製品名は「北の星」であった。

大正元年、猿別市街で脇清吉が酒醸所を開業したが、同4年に施設の総てを火災で焼き廃業した。このほか、明治41年、42年の二カ年間、醸造したものがいたが、営業者も営業した場所も不明である。

十勝清酒製造の歴史(幕別町)②



昭和39年5月30日「千歳鶴」の日本清酒株式会社では、取締役会議で帯広酒造工場建設を決定した。建設場所は札内地区。40年4月に国道38号線沿いの地に総工費5億円で工場建設に着手し、翌41年に完成、8月から操業を始めた。工場には1時間に2千本の酒を入れることの出来るびん詰機を備え、年間2千4百キロリットルの清酒を主に道東方面に出荷した。

その後、札幌工場の製造能力を強化したため、61年3月に帯広工場での製造を中止し、以後、日本清酒(株)帯広支店は営業のみの支店となった。



十勝清酒製造の歴史(芽室町)

本町の醸造業は、明治43(1910)年10月、山本外次郎が清酒醸造を始めたのが最初です。当時の本町に供給された清酒の多くは、越後、大山、灘からのものでした。山本醸造店は、道産米の品質では地酒の原料として使えないので、初めは北越、出羽方面から原料米を移入し、私設の精米所で精米して使用しました。醸造された清酒は「長寿」「千代正宗」の商標で売れ出され、初年度の産額は45kl、2万7,000円でした。

その後、道産米が改良されて本州米と混ぜた原料を使用し、商標も銘酒「長寿」と改称して、昭和26(1951)年ごろは年産99klになりました。

その後道外から移入酒が増えて地酒が不振になり、同48(1973)年に製造を中止しました。